

海外学生派遣事業 実績報告書



生命科学研究科 生理科学専攻
佐々木 章宏

所属: 生命科学研究所 生理科学専攻
氏名: 佐々木 章宏
海外派遣先国名: ドイツ, ライプツィヒ
海外派遣先大学名: Max Plank Institute for Human Cognitive and Brain Science,
Department of Psychology
海外派遣期間: 2010年1月4日 ~ 2010年3月31日

<海外派遣先大学について>

私が滞在したマックスプランク研究所は、旧東ドイツに位置するライプツィヒという都市にあり、赤ん坊から大人までのヒトを対象とした行動科学や脳科学を中心に研究が進められている。研究所は5つのデパートメントとそれとは独立したいくつかの研究グループからなるが、分野が近いこともありグループの垣根を越えた共同研究が盛んに行われている。また、近年の認知科学研究に不可欠とも言えるMRIスキャナー(3テスラと7テスラの高磁場装置)だけでなく、経頭蓋磁気刺激装置などの装置も備えている。

<海外派遣前の準備>

海外派遣当時はD4で、それまでに行っていた実験のデータもまとめて投稿論文の準備もある程度の目処が付きそうということで派遣事業に応募した。派遣先の教授とは受入れの許可を得るために連絡するまで面識はなく、投稿論文の準備を進める中で興味深い論文を見つけ派遣先として選択した。派遣事業への応募のため受入れ先の教授にコンタクトを取ったのが派遣の約10ヶ月前であった。この時には自分の行ってきた研究や関心をもっている事についてメールでやりとりをする程度であった。派遣の2ヶ月前頃に宿泊施設や日程の詳細について打ち合わせるとともに、滞在中の研究について相談した。

<海外派遣中の勉学・研究>

私の研究テーマは他者の動作を真似る行為(動作模倣)に関する脳内メカニズムを解明することである。しかし、滞在期間の3ヶ月では新たに課題を準備してMRIを用いた実験を行うことは短いということで、受入れ先の研究室で行われているプロジェクトに加わり実験を行うということになった。具体的には、他者動作の観察に関わる神経基盤についての研究を進めているポスドク研究者が進めているプロジェクトに加わり、課題や実験プログラムの作成に携わった。

授業は無かったが、研究所内で行われるセミナーには欠かさず参加した。

<海外派遣中に行った勉学・研究以外の活動>

ライプツィヒは、かつてバッハなどの有名な音楽家が活躍していた音楽の街である。週末にはバッハが眠るトーマス教会でオーケストラの演奏を聞いたり、街にある美術館、博物館を訪れたりもした。一度だけ週末を利用して、ベルリンに出掛け街を散策した。また、セミナーに訪れた研究者との食事会にも参加させてもらった。

<海外派遣費用について>

派遣事業による助成金、学生支援機構からの奨学金と合わせて派遣事業への応募を決めてからの貯金を渡航費、生活費に充てた。派遣時期が年明けだったこともあり、ヨーロッパへの渡航費は他の時期に比べていくらか安い運賃であった(15, 6万円)。また滞在先の研究所が持っているゲストアパート(キッチン、バスルームが共用)に滞在させてもらったため一ヶ月の家賃も400ユーロ(5万円程度)と当初の資金計画よりも安く済んだ。

<海外派遣先での語学状況>

研究所内では基本的に英語が使われており、英語を使ってコミュニケーションを取った。街の人は英語が話せない人が多く、買い物などをする時にはカタコトのドイツ語と愛想笑いを駆使して何とか問題なく過ごせた。出発1年前の段階では、TOEICが700点程度で出発までにトレーニングを積んで行っ

たものの早い会話についていくのは少し大変さを感じた。

<海外派遣先で困ったこと>

旧東ドイツであることもあってか、住んでいたアパートの近くにはスプレーで落書きされた廃墟があったり、夜中にクラッカーの音が鳴り響くなど必ずしも治安が良い思える土地では無かった。

<海外派遣を希望する後輩へアドバイス>

3ヶ月は思った以上にあっという間に過ぎていくので、事前の打合せと準備をしっかりとすることが充実した研究生生活を送るには必要である。私は語学に自信がなく出発直前に焦ったりもしたが、実際に行ってみるとそこまで怖がらなくても大丈夫であったし、なにより異国での生活は楽しい。将来留学を考えている人にとって、この派遣事業はまたとない機会だと思う。

